平成23年7月1日発行　第42巻 第7号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

7
2011

●特集

東日本大震災 現地活動と支援報告

●FRONT RUNNER

三重県国民健康保険団体連合会

明石悦子さん

●PEOPLE

自立生活サポートセンター・もやい
事務局長、保健師

うてつあきこさん

FRONT RUNNER

大切なのは人と人との結びつき

多彩なキャリアで培った人脈を生かして

明石悦子さん

●三重県国民健康保険団体連合会 事業課 保健専門監

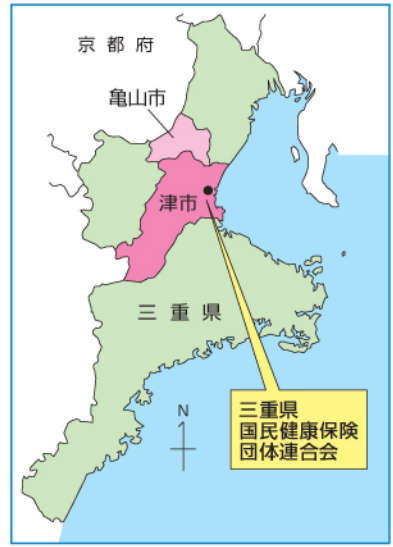
取材・文　編集部　photographs：Sei Kamiyasu

今月のフロントランナー、明石悦子さんの経歴は変化に富んでいる。町の保健師からスタートし、保健師学校・短大教員、県の保健師、私立看護学校教員をへて、現在は国民健康保険団体連合会の保健専門監だ。

三重県の中でも京都府よりの亀山市の出身。看護職の道に進むことになったのは高校の先輩が三重大学医学部附属看護学校に進学したことがきっかけ。それまでは大学受験を目指して勉強し、看護にはまったく関心がなかったという。それが憧れの優秀な先輩の進路選択に「そういう道もある」と刺激を受け、高校3年のときに方向転換。三重、京都、東京の看護学校を受験して3校とも合格し、最終的に進学先として選んだのは京都第二赤十字高等看護学院だった。

「京都という土地が好きだったこともありますが、日赤は卒業したら日赤病院で勤務することを条件に学費が免除されるのです。制服も貸与されました。病院の中に学校があり、実習しやすい環境にも魅力を感じました」

先輩の影響でなんとなく選んだ看護の道だったが、病気の知識やからだの知識を知るほどに高校までの学業にはない面白さを感じ、のめりこんでいくのが分かった。実習が始まると患者さんたちとの触れ合いがある。看護技術を提供することで良くなっていく患者さんたちの姿を見たり、「学生さん、頑張ってね」と声をかけられたり――人とかかわり、人の役に立つ喜びを実感していく中で「自分は看護職に向いている」と確認することができた。明石さんが自信を深める一方で、血を見るのが苦手など、看護職に向いていないと気づいた学生たちは戴帽式を待たずして辞めていった。



保健師という職種を知ったのは2年生のとき。保健所実習で結核のケース訪問を通してだった。病院実習を続けるうちに、治療をしても入退院を繰り返す患者が多いことに疑問を抱きはじめたこともあり、地域で予防に携わる保健師への関心は高まっていった。3年生のときに保健師を目指して進学す

特集

東日本大震災
現地活動と支援報告

東日本大震災

震災後の支援活動は中長期支援の段階に入り、被災地は復興に向け歩み出している。今月号では、気仙沼市（５月号掲載）と陸前高田市（５,６月号掲載）の続報をはじめ、いわき市保健師の活動、会津若松市での京都チームの支援、福島県からの避難者を受け入れた新潟県柏崎市の避難所の模様を報告する。さらに原発周辺市町村でボランティア活動を続ける渡會睦子さん（東京医療保健大学）の報告を掲載する。

P18 地震・津波・風評被害を乗り越えて
いわき市保健師の１カ月半
◎取材・文　編集部

P32 京都府の支援活動を通じ４人の保健師が感じたこと
会津若松市等での支援活動
◎取材・文　西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

P46 助け合う心が大きな力に
気仙沼市本吉地区における在宅支援活動
◎interview　鈴木千鶴さん（足立保健所）　聞き手・編集部

P52 新潟県中越沖地震の経験を避難所運営に生かして
柏崎市における避難者への対応
◎取材・文　西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

P58 未来を描きつつ先の見える支援を
陸前高田市での支援活動（第三報）
◎佐々木亮平（日本赤十字秋田看護大学）

P66 東日本大震災におけるボランティアとしての保健師活動
仙台市若林区と福島県内での支援を通して
◎渡會睦子（東京医療保健大学）

ひよこ保健師 season 5

介護保険における保健師の役割とは？

一人配置の部署で模索する日々

村吉 里恵子（むらよし りえこ）さん
●精華町健康福祉環境部福祉課

◀背景に写っているのが役場。一部分だけでも豪華さが伝わってくる

◎取材・文・写真
西内義雄
（医療・保健ジャーナリスト）

いったい何と読むのだろう？

ひよこさんに会うべく役場に向かう途中、列車のなかで僕は思案していた。最寄り駅は「新祝園」。これが読めなかった。やがてそれが「シンホウソノ」であり、役場がとても大きくオシャレなことに驚いた。

今回のひよこさんは村吉里恵子さん、31歳。所属が介護保険係のためか、窓口に近いところに制服姿で仕事中だった。

まず役場を案内していただくと、内部は吹き抜けの構造になっていて上層階には使っていないフロアもある。人口3万7000人弱の町にしては大きすぎる建物だ。疑問を口にすると

「ここは学研都市なので、人口が増えることを予想して、あらかじめ大きく造ってあるんですよ」

との答え。なるほど、確かに周囲には新しいマンションや住宅地がたくさんある。後で人口ピラミッドを調べてみると、若い世代も多い町だということも理解できた。

看護師だけにはなりたくない！

村吉さんは奈良県生まれ。母親は現役の看護師。ということは、その影響かと思いきや

「私は小さなころから『看護師だけには絶対なりたくない！』と思っていました」

と、意外な話から始まった。実は妹さんもいて同じ意見だったという。しかし実際は、本人は保健師、妹さんは現在助産師として働いているというから不思議なものだ。

「仕事が忙しく、ご飯もゆっくり食べていられない。いつも疲れた顔していて授業参観に来てもらえない……。きっとそんな理由だったと思うのです」

その考えは高校まで続き、それなのに、なぜか高校3年になって3度も、自ら看護体験をしている。

「なぜしたのか、今となっては分からないのです。興味本位だったのでしょうか？　取りあえず見ておこう……みたいな気持ちだったはずです」

自分の気持ちがよく分からないまま受験シーズンとなり、最終的に入ったのは奈良県立奈良病院附属看護専門学

▲家族旅行でのスナップ